

英国の風土と知的空間

ケンブリッジ——ガウンの群像（II）

廣 田 稔

ケンブリッジ大学には現在31のコレッジが存在する。

Cambridge の著者 Michael Hall によれば、^(註1) その昔この地には新石器時代より人々の活動があったとされ、ケンブリッジという土地が重要性を持つようになったのは、ローマ人たちがこの地に到来したことによった。ローマの軍勢は今日カム（Cam）川として知られる川を渡り、ここに橋を掛けたとされる。この地はそれ以前より船の行き来可能な川によって、地理的にテムズ川の谷間からノーフォーク（Norfolk）沿岸までを、そしてまた、イースト アングリア（East Anglia）からミッドランド（Midlands）とを結ぶ主要な線の間接点となる要衝の地であった。またこの地は地勢状、荒涼とした北の沼沢地と南の深い森を避け通る唯一の道筋ともなっていた。加えて環状に流れる川と周辺の沼地はローマ軍の居留地を防備の点で護り易くしていた。現在、大学の考古学並びに人類学博物館にはローマ軍以前の遺物を見ることが出来る。ローマ軍がこの地の川に橋を掛けたのはコルチェスター（Colchester）からロンドンを結ぶ道路の一部となすためであった。‘Chester’とはローマ軍の camp（野営地、居留地）を意味する事は夙に知られている。因に London はローマ軍時代の *Londinium* に由来し、*lond* は古アイルランド語の“wild”を意味した。^(註2) こうして Durolipons と呼ばれたと考えられているローマ軍の宿営地は、カム川の北側の土手、現在 Castle Hill と呼ばれる場所に拠点をおき、この場所をその砦となした。ローマ軍がこの地を去った後、ローマ軍の建物は朽ちるにまかされていたが、ケンブリッジの北方10マイル

(註1) Michael Hall, *Cambridge* (Newton Abbot: The Pevensey Press, 1995) 参照

(註2) Robert McCrum, William Cram, Robert MacNeil, BBC: *The Story of English*, (Tokyo: The Eihosha, 1986) p.21.

程の位置にあり、大聖堂で知られ国王チャールズ二世を処刑して共和制を樹立したオリヴァー クロムウェル (Oliver Cromwell 1599-1658) ゆかりの地としても知られるイーレイ (Ely) の修道僧たちが廃墟となった居留地跡に赴き、そこで一つの大理石の棺にイーレイ修道院の創始者、聖エセルドレダ (St. Etheldreda) を埋葬した。8世紀の終わりになって橋が再び掛け直されることとなり、この町は‘Grantacaestir’即ち〈グランタ川沿いの砦〉と称された。Granta とは Cam 川の別称である。875年による『アングロ・サクソン年代記』によれば、この町は‘Grantabrycge’と記されている。‘bridge’という語が英語で使用された最古の例の一つとされる。^(註3) このことによってこの町が橋によって知られ、橋があったために交易が進んでいたことが示し出されている。921年まではデーン人たちの支配下に置かれたが、エドガー王 (King Edgar) の治世下 (956-75) に於いて中世以前の繁栄の頂点にあったという。当時、この地は貨幣鑄造を行う市場町として知られ、ノリッジ (Norwich) やイプスウィッチ (Ipswich) といったイースト アングリアの中心的町と同じ重要性を持っていた。1010年、ケンブリッジはヴァイキングの襲撃を受け破壊されたもののこの町の復興は早く、1066年のノルマンディ公 ウィリアム (William the Conqueror 1027-87, 治世1066-87) による英国征服のかなり以前には既に再び栄えを取り戻していた。今日まで残る数多いサクソン人の墓石の石板が上質なものであることから、この町には豊かな富があったことが証拠立てられている。サクソン時代にはカム川の両側に人々の共同体が栄えていた。Castle Hill に当時の統治の所在地があり、Peas Hill 並びに Market Hill の南側土手の人々の共同体が繁栄を見せていた。南側は多くの船着場があって、ケンブリッジに品物を運ぶ荷船を繋ぐよい設備があった。

1068年ウィリアム征服王はスコットランドのマルカム王 (King Malcolm) と和平を結び、南に下る途中ケンブリッジを訪れる。王はこの地域への権力強化のために現在 Castle Hill として知られる場所に城を築いた。元々、木による城で険しい丘の上に築かれたもので、現在もこの丘は残っている。この丘の頂きからは、四方360度にわたってケンブリッジの街並みのみならず、その向こうに続くケンブリッジシャーの田園を見渡すことができる。イースト

(註3) Michael Hall, *ibid.*, p.1.

アングリア地方の平坦な野とゆるやかな勾配で起伏する大地の豊かな広がりを一望に収めることができる。街のほぼ中心にキングズ コレッジ チャペルの東西に延びる雄姿が横たわる。詩人ワーズワスが故郷の湖水地方からケンブリッジに入学のためケンブリッジの街に入って初めてキングズ コレッジ チャペルを目にしたのは、この地点からであったと考えられる。この時、想像力豊かな青年詩人ワーズワスは尖塔を聳えさせている巨大なこの建築物に、恰も角を持った巨大な動物の姿をも連想したと思われる。Ernest de Selincourt 編による1805年版 *The Prelude* に詩人は‘The long-back’d Chapel’「背の長い礼拝堂」と表現したことは既に先の論考で記した通りである。詩人は長い動物の背をその屋根の形に連想したと推測される。この記述が同じく Selincourt による1850年版では‘long-roof’d chapel’「長い屋根の礼拝堂」と書き改められることになった詩人の描出の相違点をめぐっても筆者は論じているので^(註4)、ここに改めて論じることは避けねばならない。

中世時代の大学は今日の様相とは大いに異なるものであった。当時、学生たちは全て男子のみでずっと年令も若い14歳又は15歳でそれぞれの学科課程を修め出していた。大学教育はその終わりまで7年間を要したが最後まで終了出来る学生は少なかった。大学入学の必須科目は読み書き及び基礎的ラテン語であった。簡単なラテン語は‘grammatica’「古典文献学」と称され‘trivium’「中世の大学の七教養科目中の三学科（文法・修辞・論理）」という初歩課程として主として将来教育に携わろうとする者を対象とするものであった。18世紀に至るまでこうした形が続けられた。中世期の終わりには、これは学士号取得への資格試験的なものとなった。学士号取得が‘trivium’を完成させるものであった。最終的に‘quadrium’という学科課程があり、算術、音楽、天文学及び幾何を修めることにより、修士号 (Master of Arts) が資格付けられた。その後、学生たちは神学、民法又は教会法を学ぶ権利を持ち、これらの学問を修めることにより立派な報酬を得る職業を得ることとつながっていた。大学における居住資格を得るためには、学生たちはケンブリッジ到着後15日以内に学寮長の大学入学許可のリストに登録されねばならな

(註4) 廣田稔「ワーズワス『序曲』第三巻‘long-back’d’から‘long-roof’d’をめぐって」九州大学英語英文学論叢 第47集 1997年 pp.1~13参照

かった。最初の学生たちは通常の下宿屋に住んだが、徐々に学生向けの hostel が作られていった。この寄宿寮住まいの学生たちは個々に部屋代、食事代を払い、大学当局の教育指導を受けねばならなかった。こうして1284年最初のコレッジ、Peterhouse が Hugh de Balsham によって設立されることとなった。大抵の中世の学部生たちはコレッジ設立後も hostel に居住した。これはコレッジが当初主に学生に対して責任を持つことのない教師たちの共同体であったことによるものであった。しかし15世紀後半までには主として Winchester の大司教であった William of Wykeham が創設したオックスフォードの New College (1379年創立) に競う形で各コレッジは学生と教師が共に住まう共同体として設立されることとなった。そして今日まで続くコレッジ システムが確立されたのである。大学は教育を授け学位を授与する一方、コレッジは食事と部屋そして最終的に個人指導を提供することとなった。この個人指導はオックスフォードでは‘tutorial’と称し、ケンブリッジでは‘supervision’と称している。学生は個人指導教授 (tutor) の指導を受ける。コレッジはしばしば富裕な後援者によって設立され寄付を与えられた。

1275年、ケンブリッジに大学は土地を購入し、そこに Old School が建てられることとなり、最初のコレッジの創設時期に7つのコレッジが創設された。これらの中に後にクレア コレッジ (Clare College) となるクレア ホール (Clare Hall)、ゴンヴィル キーズ コレッジ (Gonville and Caius College) となるゴンヴィル ホール (Gonville Hall)、トリニティ コレッジ (Trinity College) となるトリニティ ホール (Trinity Hal) があり、マイケル 하우스 (Michael house) とキングズ ホール (King's Hall) とがトリニティ レイン (Trinity Lane) とキャム川の間に新しい大学敷地を形成した。中でもキングズ ホールが王室の寵遇を受けたことによって最も栄えた。1440年、この街の地勢を一変させることとなるが、それはヘンリー6世 (Henry VI) がキングズ コレッジのために敷地を獲得することに始まったものであった。新しい敷地はあまりにも広大なものであったので、当時の通りという通りが姿を消すという有様であった。これによって街全体の4分の1がかつての姿を消したとさえ言われている。しかし、キングズ コレッジの建設第二期 (1469-1594) に於いては街全体を荒廃させるものではなく、ヘンリー8世

(Henry VIII 1491-1547) によって最終的に一まとめにされた敷地は廃された宗教施設などを取り込んだものであった。この時期になるとコレッジは学者たちの住居としてのみならず教育施設として、又学生の寄宿施設と見做されることとなった。ケンブリッジは1441年のキングズ コレッジの創設と1546年のトリニティ コレッジ (Trinity College) の創設の間に大学は大きくなり、国際的名声を得ていくこととなった。エリザベス女王の廷臣で大学総長であったセシル卿 (Sir William Cecil) が大学の新しい法令を設けて以来、それは300年の間変えられることはなかった。それは全ての学生はコレッジのメンバーでなければならないというものであり、それは今日も依然として守られている。

16世紀初頭には、ケンブリッジはヨーロッパのルネッサンスの影響を強く受け、過去数世紀に於いてはじめてカリキュラムにも広範な変革がなされた。文芸復興の先覚者として知られるオランダの人文学者エラスムス (Desiderius Erasmus 1466?-1536) は1511年から1514年の間ケンブリッジにあって、ギリシア語、聖書研究、そして中世学者必読のアリストテレス以外の他の古典作家を読むことを導入した。今日、エラスムスの部屋はクイーンズ コレッジ (Queens' College) 内に残されている。この当時までに創設されたコレッジは以下の通りである。

コレッジ	創立年
Peterhouse	1284
Clare	1338
Pembroke	1347
Trinity Hall	1350
Corpus Christi	1352
King's	1441
Queens'	1448
St. Catherine's	1473
Jesus	1496
Christ's (前の God's House を合併)	1505

St. John's	1511
Magdalene	1542
Trinity (King's Hall と Michael house を合併)	1546
Gonville and Caius (Gonville Hall を合併)	1559
Emmanuel	1584
Sidney Sussex	1596 ^(註5)

因にそれ以降の各コレッジの創立年代は以下の通りである。

Downing College	1800
Girton College	1873
Newnham College	1875
Selwyn College	1882
New Hall	1954
Churchill College	1960
Darwin College	1964
Lucy Cavendish College	1965
Fitzwilliam College	1966
Clare Hall	1966
Hughes Hall	1968
Wolfson College	1973
St. Edmund's House	1975
Homerton College	1977
Robinson College	1977 ^(註6)

上記の内 Darwin, Clare Hall, Hughes Hall, Wolfson, St. Edmund's House は大学院コレッジである。

The Oxford Literary Guide to the British Isles^(註7) 等を参照することに

(註5) Geoffrey Tyack, *Oxford and Cambridge* (London: A&C Black, 1995) pp.147-152.

(註6) *Cambridge Commemorated*, ed. Laurence and Helen Fowler (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1989) p.373.

(註7) *The Oxford Literary Guide to the British Isles*, Dorothy Eagle and Hilary Carnell ed. (Oxford University Press, 1980)

よってイギリス文学史上に名を残した文人たちの中でケンブリッジ大学出身又はこの大学に係わる主だった文人たちを各コレッジ別に拾い見ることが出来る。

トリニティでは George Gordon Byron 6th Baron (1788-1824), John Dryden (1631-1700), George Herbert (1593-1633), A. E. Houseman (1859-1936), Andrew Marvel (1621-1678), Lord Alfred Tennyson (1809-92), 著述家 Charles Kingsley (1819-75), 詩人、児童文学者 A. A. Milne, 『金枝篇』で知られる人類学者 James G. Frazer, (因にトリニティは Sir Isaac Newton を初めとして科学者 Lord Rutherford, 哲学者 Bertrand Russell 又 Sir Francis Bacon (1561-1626) のコレッジでもある。)

キングズは *A Passage to India* (1924) や *Howards End* (1910) の Edward Morgan Forster (1879-1970), 戦争詩人 Rupert Brooke (1887-1915)。セント ジョーンズは詩人 William Wordsworth (1770-1850), 諷刺家小説家 Samuel Butler (1835-1902), 詩人 Robert Herrick (1591-1674), *The Castle of Otranto* (1765) の Horace Walpole (1717-97)。ジーザスは詩人 Samuel Taylor Coleridge (1772-1834), 作家 Laurence Sterne (1713-68)。コーパス クリスティは劇作家 Christopher Marlowe (1564-93), John Fletcher (1579-1625)。ペンブロークは *The Faerie Queene* (1590, 96) の Edmund Spenser (1552?-99), “Elegy Written in a Country Churchyard”の Thomas Gray (1716-71), James I 世の勅命を受け成された *The Authorized Version* (1611) の主たる翻訳者として知られる Sir Lancelot Andrews (1555-1626), 桂冠詩人 Ted Hughes。クライストは詩人 John Milton (1608-1678)。モードリンは『日記』(1660-69) で有名な Samuel Pepys (1633-1703) を輩出した。

宗教詩人 John Donne (1571-1631) そして劇作家 Ben Jonson (1573?-1637) もケンブリッジから名誉学位を授与され, Honorary Fellow として Rudyard Kipling (1865-1936), 詩人 T. S. Eliot や Thomas Hardy の名も認めることができる。

このようにケンブリッジは英文学史上に名を列ねている文人たちをいかに多数輩出しているかを知ることができる。このような文人たちがケンブリッジ

の学生時代をどのように過ごし受け止めていたかを一、二の例で見ることにも出来る。クライスト コレッジにおいて‘Domina, the Lady’〈クライトの貴婦人〉^(註8) という呼び名を与えられていた詩人ミルトンは、次のように記している。

「父は私をわが国にある二つの大学のうちの一つケインブリヂにやってくれた。ここで私は七年間、すべての不真面な所業をさけ、立派な人々に認められつつ、定められた通り学業と研鑽に時をすごした。そしてやがて、いわゆるマスターの学位を称讃の言葉とともに得ることができた」^(註9)
(平井正穂訳)

ミルトンがいかに勤勉な学生生活を送ったかが偲ばれる記述である。彼は年少の頃からこのように勤勉さを培っていたことは以下の言葉からも窺うことができる。これはミルトンがケンブリッジに入学する以前のものである。

‘From the twelfth year of my age I scarcely ever went from my lessons to bed before midnight. Then, when I had acquired various tongues and also not insignificant taste for the sweetness of philosophy, [my father] sent me to Cambridge.’^(註10)

そして後にギングズに学び教えた E. M. Forster は以下のように回顧する。

As Cambridge filled up with friends it acquired a magic quality. Body and spirit, reason and emotion, work and play, architecture and scenery, laughter and seriousness, life and art—these pairs which are elsewhere contrasted were there fused into one. People and books reinforced one another, intelligence joined hands with affection, speculation became a passion, and discussion was made profound by love.^(註11)

「ケンブリッジは友人たちで溢れていたもので、ここには魔術的な資質があっ

(註8) Graham Chaine, *A Literary History of Cambridge* (Cambridge: The Pevensey Press, 1985) p.44.

(註9) 平井正穂『J. Milton』研究社 昭和44年 p.48.

(註10) Graham Chaine, op. cit., p.44.

(註11) Martial Rose, *E. M. Foster* (London: Evans Brothers, 1970), p.12.

た。肉体と精神，理性と感情，学びと遊び，建築と風景，笑いと真面目さ，人生と芸術—他の場所では対照的なこれら1対のものがここでは一つのもので溶け合っていた。人々と書物とがお互いに補完し合い，知性が愛情と手を携え，思惑が情熱となり，議論は愛によって深淵なものとなされていた。」

1901年にケンブリッジに入学したフォスターにとって「ケンブリッジとイタリーとはフォスターの人生における主要な解放の経験であり，明らかに彼の書き物の中に映し出されることとなった。」^(註12)

1805年10月トリニティに入学した詩人バイロンがコレッジから実家の弁護士であり実務を預かる John Hanson という人物に宛てた最初の手紙にはこのように記されている。

I will be obliged to you to order me down 4 Dozen of Wine, Port — Sherry — Claret, & Madeira, one Dozen of Each; I have got part of my Furniture in, & beginning to admire a College Life. Yesterday my appearance in the Hall in my State Robes was Superb, but uncomfortable to my Diffidence.

(註13)

このようにポート，シェリー，クラレットにマデイラというワインをそれぞれ1ダースずつ4ダースも注文してくれるように依頼し，家具の一部を運び込んでコレッジ生活の素晴らしさを味合い始めたバイロンは，気おくれして窮屈に感じながらも儀式用のガウンを身に纏い堂々とホールに姿を現している。いかにも貴族の出に相応しい華麗なまでの大学入学の始まりである。その後2週間も経ずして彼の異母姉妹 Augusta に宛てた手紙には次のように記している。

As might be supposed I like a College Life extremely, especially as I have escaped the Trammels or rather Fetters of my domestic Tyrant Mrs

(註12) *ibid.* p. 13.

(註13) Graham Chainey, *op. cit.*, p.110.

Byron… I am now most pleasantly situated in Superexcellent Rooms, Flanked on one side by my Tutor, on the other by an old Fellow, both of whom are rather checks upon my vivacity. I am allowed 500 a year, a Servant and Horse, so Feel as independent as a German Prince who coins his own Cash, or a Cherokee Chief who coins no Cash at all, but enjoys what is more precious, Liberty.^(註14)

「察しはつくと思うけれど僕はとてもコレッジ生活が気に入っている。特に僕の実家の暴君バイロン夫人の束縛或いはむしろ足かせから逃れたから…僕は今最高の特別室でとても居心地よく過している。一方の片側に僕の指導教授、もう一方に古老のフェロウに護られる形で、この二人共僕の浮かれ騒ぎにいささか歯止めを効かそうという訳だ。僕に一年に500ポンドが充てがわれ、召使が一人と馬がついている。だから自分専用のコインを造るドイツのプリンス並みにそれとも現金などといったものは何一つ造り出さないが、その代りそれよりももっと貴重な自由というものを楽しんでいるチェロキーインディアンの酋長みたいに独立した気分を味わっている」

バイロンの言う‘Superexcellent rooms’は、コレッジの豪華な Neville’s Court の北側の真中にある2階にあったと考えられているが、「貴族としてバイロンは教授たちの座るテーブルで食事を取り、金の房飾りの付いた角帽を被った豪華な刺繍のガウンを纏って風の吹き渡る方庭を足を引きずって歩いた」^(註15) と言う。

バイロンはまたここで後に近衛兵となる Edward Noel Long という友人と共に過した時期を‘the happiest, perhaps, days of my life’^(註16) と「人生の最も幸せな日々」と述べている。トリニティで学び親友となった二人はカム川に飛び込んでもぐる技を競い合ったことを記している。

(註14) *ibid.*, p.110.

(註15) *ibid.*, p.111.

(註16) *ibid.*, p.113.

Though Cam's is not a very 'translucent wave' it was fourteen feet deep, where we used to dive for, and pick up — having thrown them in on purpose — plates, eggs, and even shillings. I remember, in particular, there was the stump of a tree (at least ten or twelve feet deep) in the bed of the river, in a spot where we bathed most commonly, round which I used to cling, and 'wonder how the devil I came there'.^(註17)

「カム川の水はあまり「透明な水」ではなかったものの14フィートの深さがあり、そこで僕たちはもぐってそして皿や卵やシリング硬貨まで拾い上げていた。—わざとそんな物を投げ入れた後で—僕が特に憶えているのは川底(少なくとも10フィート又は12フィートの深さがあったが)に一本の木の切株があって僕はよくその周りにしがみついて「一体どうやってこんな所にやって来たのか」と思うのだった。」

このバイロンとロングとがもぐって泳いでいた場所は今日も残っている。ケンブリッジの町から2マイル南に位置する美しい小村グランチェスター(Grantchester)の森木立の中にある。カム川の流れてその川沿いに緑の木陰の中に続く一本のfootpathを辿っていくと、小道はGrantchester meadowsと呼ばれる広々とした牧草地の中を抜け、その左手向うにグラント(Granta)と呼ばれるカムの支流の流れ、右手には広大なケンブリッジ郊外の麦畑が広がっている。麦畑の境はサンザシ(May, hawthorn)やブラックベリーの生垣で区切られて、小道はグランチェスターという名のかつてローマ軍の居留地でもあった村へと続いている。この村へはケンブリッジから'punt'と呼ばれる平底の小舟を操ってカム川からその支流グラント川の流れを辿ることもできる。バイロンとロングが泳いだ場所はByron's Poolと称され、森木立の中に流れるグラント川にその当時を偲ばせる。五月この川辺の小道にはサンザシの白い花が咲き乱れ、水面にその花の姿を映し出す。ここはチャーサーが『カンタベリー物語』の中で記していた『粉挽き小屋』

(註17) *ibid.*, p.113.

(註18) のあった淀みの場所から僅かに下流の場所であり、ワーズワスも『序曲』の中で「心地よいトランピントンの粉挽き小屋で私はチャーサーと共に笑った。サンザシの木陰で……」(註19) と詠じたように文学の豊かな香りに満たされている。

トリニティのレン ライブラリーの正面奥の中央に畢生の名作 *Childe Harold's Pilgrimage* (1812,'16,'18) を右手に抱えたバイロンの大理石の像は、コレッジ チャペル前室に立つプリズムを抱えたニュートンの立像と共に、トリニティを訪れ見る者にとって感銘深いものはないだろう。バイロンはケンブリッジにおいて既に *Hours of Idleness* (1807) を出版し、詩作に専念し、精力的に文学活動を行っている。1809年には *English Bards and Scotch Reviewers* を出しているが、これさえも彼の文学活動の一部でしかなかった。1809年10月 Miss Pigot という女性に宛てた手紙にはこのように記されている。

「僕は214頁の小説、2～3週間のうちに(匿名で)註付きの380行から成る詩一篇、ボスワークフィールドについての560行の詩、6篇の小篇の詩の他に別の250行の押韻詩を書いています。」(註20)

このような文学活動の一方でバイロンは奔放な学生生活の一面を見せている。そのようなことの例として彼が一頭の熊を飼っていたという興味深いエピソードが残されている。バイロン自らこのように述べている。

‘I have got a new friend, the finest in the world, a *tame* Bear, when I brought him here, they asked me what I mean to do with him, and my reply was “he should *sit* for a Fellowship.”—Sherard will explain the meaning of the sentence if it is ambiguous.’(註21)

ここに見られるように熊など連れて来てどうしようというのだと問われた

(註18) Geoffrey Chaucer: *The Canterbury Tales* ‘The Knight’s Tale’, l. 1511.

(註19) William Wordsworth: *The Prelude* (1850) Book III, ll. 276-7.

(註20) Graham Chainey, op. cit., p.116.

(註21) *ibid.*, p.116.

のに対して「親交」のためと答えたバイロンの真意がどこにあったか推測の域を出ないものの、バイロンは当時ケンブリッジに於てユークリッド幾何学や数学が重視され、文学や詩作が軽んじられていたことへの抵抗の意図もあったのではないかと察せられる。学期試験では数学の法則に弱い学生達は叱責される一方で、ユークリッド幾何学やスパルタ法については飛び抜けてはいてもマグカルタ憲章やシェイクスピアについては何一つ知ることのない学生たちを送り出している大学の実状を、バイロンは痛烈に揶揄する気持を表わし出して、熊を相手にすることの方が、このような望みない状況と向かい合うよりも願わしいという心況にあったことを示したのかも知れない。バイロンは数学は将来軍人になろうというのなら少しは役に立つかも知れないが他に意味はないものと考えていた。いずれにしてもバイロンは当初のケンブリッジの生活が人生で最高の時であるように言い述べながら、ある時はこのケンブリッジの学生生活の中で自暴自棄になる程の挫折感にも襲われていたように思われる。「僕のここでの生活は絶えざる浪費の日課なのだ……いまこの時も僕は頭の中にクラレット酒の一瓶を注いで、両目に涙をいっぱいためている」と記した。^(註22)

バイロンの死後 J. M.F. Wright はトリニティにバイロン卿が熊といた時のことに関して「卿は犬のように従う一頭の巨大な熊を引き連れて通りを歩いたが、その熊はこの(トリニティ)の塔の部屋の唯一の使用人だった」^(註23)と記している。

バイロンがロングとグランタの川の流れて水浴びに興じたのもこのような息抜きの瞬間の一つの表われであったかも知れない。このグランタ川の流れる美しい小さな村はチョーサーの頃から20世紀を代表するバージニア・ウルフを中心とするブルームズベリーグループに至る人々を引き付け、またイギリスが世界に誇る幾多の偉人たちを魅了してやまなかつた村である。

このグランチェスターの村の中程に Grantchester Church があり、ほぼ1100年頃まで溯るこの教会の歴史もさることながら、このひなびた教区の教

(註22) *ibid.*, p115.

(註23) *ibid.*, p.115.

会にイギリス各地のみならず、世界の各国から人々が訪れて来るシンボルを認めることができる。それはこの教会の時計塔であるが、これこそはこの村をこよなく愛し、第1次対戦に従軍し夭折した戦争詩人ルパート ブルック (Rupert Brooke 1887-1915) によって記念碑ともなされた時計塔である。それはブルックの名を不朽のものとなしている名詩として名高い「兵士」(“The Soldier”) と共に美しく衷愁に満ちた珠玉の一篇「グランチェスターの古き牧師館」(“The Old Vicarage, Grantchester”) の最終二行の記述に描かれたことによる。

“Stand the church clock at ten to three?
And is there honey still for tea?”

「教会の時計は3時10分前を指しているのだろうか。
そしてまだお茶の蜂蜜はまだとりのけてあるのだろうか」^(註24)

ルパート ブルックは父 William Parker Brooke と母 Ruth Mary Brooke の二男として1887年8月3日ラグビー (Rugby) に生まれた。父はケンブリッジ King's のフェロウであり、パブリックスクールの名門ラグビー校の assistant master, School Field の housemaster であった。ルパートはラグビーでの教育を終えた後1906年ケンブリッジ大学のキングズ コレッジに奨学金を得、古典学を学ぶために入学した。彼の風貌を詩人イエイツ (W. B. Yeats) が “the most beautiful young man in England” 「イギリス一の美男子」と称し、ルパートと親交を結んだ伝記作家リットン ストレッチー (Lytton Strachey) がヴァージニア ステューブン (Virginia Stephen—後

(註24) 「3時10分前」に関してはブルックは前行との詩の脚韻を踏ませるために (three と tea) このような形としたことが察せられる。これに関して1986年に「ケンブリッジ ニュース」に記事を書いた Lady Tansley はこのように述べている。「私たちが1907年にこの場所を訪れた時、時計は8時15分前で止まっていた。そしてそれは(1915年)ルパート ブルックの死までそのままだったのです。そしてその後敬虔な心遣いによって時計の針を3時10分にしてしばらくはそのままにされていたのです」と。1994年に漸く再度時計は動かされることとなった。(Grantchester Church, Grantchester Parochial Church Council 1988) p.7.

の Woolf) に宛てた1908年の手紙の中で“Rupert Brooke, isn't it a romantic name?” 「ルパートブルックとはなんとロマンティックな名だろう」と記した、人も羨やむ美貌の青年であった。さしずめギリシア神話のナルキッソスとも思える美青年であった。かのチャールズ ダーウィン (Charles Darwin) の3人の孫娘の一人であったフランシス ダーウィン (後 Cornford) は、ルパートと詩と詩作法についてメモを取り交し合う仲であったが、ルパートに関する有名な4行の詩を次のように書いている。

A young Apollo, golden haired
 Stands dreaming on the edge of strife,
 Magnificently unprepared
 For the long littleness of life ^(註25)

黄金の髪の若きアポロは
 闘争の縁べりに夢見つつ立ち
 長い人生の瑣事には
 ものの見事に疎かった

この美しき「若きアポロ」は生涯に僅かに小さな詩集一冊しか世に出すことなく27歳という短い生涯を閉じた詩人であったにも拘らず、ルパートブルックの遺したものの人々に与えた感動は大きく、世の数多くの詩人たちにも増して輝きそのイメージはより大きく立ち現われている。1915年第一次大戦の最中、Gallipoli に向け航行中の仏艦上に於て、敗血症のために27歳の生涯を閉じた時、海軍司令長官 Sir Ian Hamilton はブルックがいかに不世出の詩人であったかその理由を次のように述懐して述べた。

「それは彼が英雄であったからなのか—英雄なら何千といた。彼が英雄に見えたからなのか。—そのように見える者は殆どいなかった。彼には天才的才能があったからなのか。—それなら他にもいた。だがルパートブルックは神

(註25) Peter Miller, *The Irregular Verses of Rupert Brooke* (Kencot, Green Branch Press, 2003) p.66.

が授けたこれらすべて3つの賜物をその手に握っていた……」(註26)

ルパートはその死に先立って英国海軍の現役任務についていたが、1914年9月24日に時の海軍提督 Winston Churchill と食事を共にした後記した彼自身の言葉によるとこのようなものであった。

「僕は正確に言って陸軍に入隊したのではなく、海軍に入った—その方がもっとイギリス人らしいやり方だと思う—ウィンストンは僕に海軍小隊に任務を与えてくれた……僕は陸軍は軽蔑する。イギリスは海を支配しているのだ—」(註27)

ルパートの発病は Antwerp での作戦行動参加後、ダーダネルス海峡に送られた時のことであり、移された仏艦上で不帰の客となった。彼の亡き骸はエーゲ海スカイロス島のオリーブの木の下に埋葬された。時に1945年4月23日金曜日、それは奇しくもシェイクスピアの命日であり、またイングランドの守護聖人セント ジョージ (St. George) の聖日でもあった。このブルックの訃報を知らされた海軍大臣 (First Lord of the Admiralty) であった Winston Churchill は John Churchill 少佐に次のように打電したという。

「貴官の任務の許す限り余に代りルパート ブルックの葬儀参列に努められたし。彼の如きにはまたと会い難し」と。(註28)

チャーチルは1915年4月26日に『タイムズ誌』に追悼文を寄せ poet-soldier 〈戦争詩人〉としてのブルックを讃えた。

「彼は祖国イギリスの美わしさと偉大さを知る者として祖国のためにいさぎよく命を捧げた」と述べこのように記している。

「彼の遺した比類なき戦争ソネットの数篇に彼が托した思いは、人々が戦ったすべての戦いの中で最も苛酷で残酷、かつ最も報われ難いこの戦いに、決然としてまた意気高く赴かんとする何千という若者たちの相分ち合うものとなるであろう」と。(註29)

(註26) Milke Read, *Forever England* (Edinburgh: Mainstream Publishing, 1997) pp. 7-8.

(註27) The Rupert Brooke Society, Summer 2002, pp.16-17.

(註28) *Rupert Brooke-poet. 1887-1915*, p.5.

(註29) Mike Read, op. cit., p.246.

第一次大戦に従軍した所謂〈戦争詩人〉として讃えられる英国詩人たちの記念展がロンドン Imperial War Museum に於て「運命の若者たちに捧げる国歌—第一次大戦の12人の戦争詩人たち」と題して開かれた（2000年秋）折、Rupert Brooke は Edmund Blunden, Robert Graves, Wilfred Owen, Siegfried Sassoon 等と共に名を列ねた。そしてルパート ブルックの名を記した記念碑はウェストミンスター寺院の英国の最も著名な文人たちの眠る「詩人のコーナー」に掲げられ、彼の不朽の名詩「兵士」の一節はスカイロス島の彼の墓に、そして彼の母校ラグビーに円型の浮彫りの肖像の下に記されている。*The Sphere* 誌は「1586年におけるフィリップ シドニー以来、祖国の戦いの中で生命を捧げた英国で唯一人の評価に値する詩人」^(註30) と讃辞を贈った。

The Soldier

If I should die, think only this of me:
 That there's some corner of a foreign field
 That is forever England. There shall be
 In that rich earth a richer dust concealed;
 A dust whom England bore, shaped, made aware,
 Gave, once, her flowers to love, her ways to roam,
 A body of England's, breathing English air,
 Washed by the rivers, blest by the suns of home.

And think, this heart, all evil shed away,
 A pulse in the eternal mind, no less
 Gives somewhere back the thoughts by England given;
 Her sights and sounds; dreams happy as her day;
 And laughter, learnt of friends; and gentleness
 In hearts at peace, under an English heaven.

(註30) *ibid.*, p.246.

「兵士」

もし僕が死ぬようなことがあったならただこうとだけ思って欲しい。

とある異国の片隅に永遠の英国があるのだと。

その豊かな大地にはさらに豊かな土くれが埋もれているのだと。

かつてはイギリスの大気を吸って、愛でたきイギリスの花を咲かせ、

逍遙の道を作り、川の流れに洗われ、

故郷の日射しに祝福されてイギリスの体となった土くれが。

そしてこう思って欲しい。全ての悪を洗い清められたこの心は

永遠の心に脈打つ鼓動となって、

イギリスによって授けられた数々の思いを、

イギリスの風光とその調べを、幸せな日の幸せな夢の数々を、

そして友から学んだ笑い声と平和な

イギリスの空の下で人々の心に宿った優しさを、

永遠の心の中に運び携えていくのだと。

ルパート ブルックがグランチェスターにキングズを離れて宿所を得たのは1909年のことであった。このグランチェスターにブルックは月夜に月の光の中を小さなボートを漕ぎ出して、2～3マイルの川を下って行ったり、また色々な折を見つけて徒歩で出かけてはそこにある The Orchard というリンゴ園の Tea Garden で tea を楽しんでいた。この Tea Garden は1897年以来開かれたもので、それはたまたま Granta 川を平底のボートで漕いで来たある一人のケンブリッジの学生が、リンゴ園の所有者 Mrs Stevenson に友人たちと一緒にリンゴの下で tea を飲ませてもらえないかと頼んだことに始っていた。そして夫人が快く彼らをもてなし、学生たちが tea を飲みとても楽しく過ごしたことが、すぐに口伝えに広まることとなり、ケンブリッジのコレッジの学生たちに人気の場所となったという。しかしこのグランチェスターへの人気はその時点から始ったのではなしに、ここには既にその700年も前から、ケンブリッジの学者たちが徒歩で、ボートで或いは馬に乗ってこの魅力的で美しい村を訪れていたのである。 *The History of The Orchard* という

この Tea Garden に備えられている小冊子にはこれまでこの場所を訪れて tea を楽しんだ著名人の名が記されているが、その多くが20世紀の世界の歴史に名を残している人々である。その幾人かを見ると、Bertrand Russell, Wittgenstein, Maynard Keynes, DNA の Crick and Watson, Rutherford, E. M. Forster, Virginia Woolf, J. B. Priestley, A. A. Milne, King George VI, Prince Charles, エベレスト登頂の Mallory そしてそれより先には「クロムウエル, ミルトン, ワーズワス, コールリッジ, ニュートン, ダーウィン, マーロウ, スペンサー」^(註31) といった人々がこの地を愛し訪れている。チャーサーもバイロンもであったことは既に記した通りである。

D. H. ローレンスはルパートについて「グランチェスターで日よけの下でパジャマ姿で詩を読んでいるギリシャ神だと彼のことを初めて聞いた」^(註32) と述べる。ルパート ブルックは、この Steven 夫妻の The Orchard につながるスレート葺き屋根の小さなコテージ風の家で2つの部屋を当てがわれ、庭の自由使用付きで週30シリングの食事代を払うことになる。部屋はつる植物の這う石のベランダに真直ぐに開いていて、小さな庭にはバラの花がいっぱいに咲いていた。「ここは素晴らしい場所だ」「僕はイチゴと蜂蜜を食べている」と彼は Hugh Dalton に書いた。そして従姉妹の Erica Cotteril には「僕はシェイクスピアに取り組んで、一日中読んだり書いたりして時々森の中や川のそばを歩いている。僕は毎朝、そして時には月明かりの中で泳いで僕の食事(主に果物)を戸外に運んで行って日がな一日幸せに浸っている。」^(註33) と書き送った。

しかし1910年にはスティーヴン夫妻はルパートと友人たちが裸足で家の中に入ったり勝手な振舞いをするので、ルパートを The Old Vicarage の Neeve 夫妻にゆだねることとなり、ルパートはこの古い牧師館に居を変えることとなる。ルパートは「Neeve 氏は洗練された人で……頭にハンカチを被って蜜蜂の巣箱の近くに坐っている」^(註34) と記しているが、この Henry Neeve 氏は趣味で蜜蜂を飼っていて、蜂蜜はこの The Old Vicarage に隣接する The Orchard Tea Garden で売られていたのである。この〈蜂蜜〉こ

(註31) Mike Read, *ibid.*, p.78.

(註32) Mike Read, *ibid.*, p.247.

(註33) Rupert Brook — *poet.*, *op. cit.*, p.3.

(註34) *ibid.*, p.3.

そ、最終行の「お茶の蜂蜜はまだ取りのけてあるのだろうか」という描出につながっている。ルパートがドイツへの旅に出た折に作ったこの詩が *Basileon* 誌に掲載された1と月後、旅から The Old Vicarage に戻った1912年7月のルパートを迎えた Mrs. Neeve との会話がエピソードとして残されている。

「ブルックが1912年7月に The Old Vicarage に戻ってきた時、彼はフローレンス ニーヴが彼の詩をバシレオン誌に見ていたことを知って喜んだ。「あのね。」と彼女はこの家での最初の午後のお茶の盆を運んで来て「まだお茶の蜂蜜はありましてよ」と言うのであった。その詩はバシレオン誌の6月号に出たばかりであった。」^(註35)

この詩は1912年5月ベルリンのカフェ デス ヴェステンズで書かれた。この詩を完成するとルパートはキングズのバシレオン誌の編集者にそれを急ぎ送り届けるが、それより先きに‘A masterpiece on its way.’と電文を送った。この短い電文に〈傑作〉と称してはばからない自信が漲っていた。そして恋人のキャサリン コックス (Catherine Cox) にはこの詩を綴るに寄せて彼女への思いを込めてこのように書き送った。

「僕は丁度今君がグランチェスターにいるかも知れないと想像しているのです。君がひどく羨ましい。あの川とトチの木が僕にととても呼び戻ってくるのです。芝の上でのお茶のことが。どうか僕に手紙を書いて下さい。そうすれば僕たちはそこで共に夏の日が過ごせるのです。」と。^(註36)

弱強四歩格という韻律によるこの詩はルパート ブルックのグランチェスターに寄せる郷愁に満ちた抒情性溢れる詩と結晶した。以下は筆者によるこの詩の抄訳である。

「グランチェスターの古き牧師館」

(1912年5月 ベルリン カフェ ヴェステンズ)

丁度今頃は僕の小さな部屋の前一面にリラの花が咲いて、そして僕の花壇

(註35) Mary Archer, *Rupert Brooke* (Cambridge: Silent Books, 2001) p.34.

(註36) Mike Read., op. cit., pp.148-149.

にもカーネーションとピンクの花とが微笑んでいることだろう。そして花壇の縁べりに沿ってケシとパンジイとが花咲いていることも僕は知っている。あゝかの地^(註37)ではトチの木^(註38)が夏を通じて、あの川の傍に緑陰のトンネルを作り、そしてその頭上には深い眠りがたゆたい、その下に神秘の川は緑の色をたたえて深く流れている。夢のように緑を滞びて、死のように深々と。—あゝ何ということだろう。僕にはそのようなことが分っているというのに！そして僕は知っている。五月の野という野が黄金色に輝いている^(註39)ことを。そして日浅く甘く大気の匂う頃、水浴びせんと走る裸の足を、輝くばかりに金色に染めていく^(註40)ことを。……

僕はこんな所で汗にまみれ、胸も悪くなり暑さに身をほてらせている。そしてかの地では木陰の流れが水々しく裸の身を抱かんと寄り添うのだ。……そしてかの地では黄金の朝の下、露がやさしく降りている。……あゝグランチェスターにありましかば、グランチェスターに。そこでは自然や大地やそれらのものに触れられもするものを。そして賢き現代の民人たちはファウヌス神が緑の中をすかして、のぞき見る姿を認め、(水の精)ナーイアスのひよろ長い頭を見て、あるいはまた、山羊の足持つファウヌス神が、低く角笛を吹くのを聞いて、古典の神々は死に絶えてはなきことを感じるのだ。

だがこれらのことは今の僕には分らないこと。僕に分るのはただ一つのこと。日がな一日身を横たえて、ケンブリッジの空を眺めているかも知れないこと。そして眠だけな草の中で花にあやされ、ひんやりとした時の流れに耳を澄ましているかも知れないことなのだ。すると幾世紀が融け合って、おぼろげにかすんでいく。グランチェスターでグランチェスターに……。すると今もなお夜明けの光に照らされた冷たい水の中で、幻の貴公子^(註41)がその淀み^(註42)を泳いで、ヘレスポイントの海峡で、はたまたステュクス神に久し

(註37) グランチェスター (Grantchester)。ケンブリッジ郊外約2マイルの距離にある。

(註38) 原文で‘は Chestnut’となっている。‘horse chetnut’のこと、いわゆる「マロニエ」のことで、上向きに房状の円錐型の花をつける。多くは白。紅色もある。

(註39) (註40) 五月にはケンブリッジ郊外の田園は一面見渡す限り菜種 (rapeseed) の花で覆われる。菜種畑に入ると足は黄色い花粉で染められる。

(註41) 詩人 Lord Byron

(註42) 淀み (‘pool’) はグランチェスターを流れるキャム川支流のグラント川が林の中に入った奥にあり、かつてこの場所はバイロンが泳ぎ Byron’s Pool と称されている。

く学び会得した泳ぎの手を試し、技を試みるのだ。

ダン チョウサー^(註43) はいまもなお、いまもなお幻の水車小屋^(註44) の下でさざめく川の流りに耳を傾け、テニソンは眼を凝らして、ケンブリッジの流れのさまを見届けるのだ。そしてあの庭では、黒と白の縞模様に草の囁きが夜を徹して忍びよる……。

ああそうだ僕は荷造りして汽車に乗ろう、そしていまひと度イングランドに戻ることにしよう。というのも、イングランドこそ素晴らしい心を持つ人々が赴き行く所。そして、ケンブリッジ州こそ、イギリス広しと言えど物知る人々が赴く土地なのだ。そしてその地方の中でも、僕にはグランチェスターのあの美しい小さな村が好ましい。……グランチェスターは、ああグランチェスターは。かの地には平安があり、聖なる静けさがある。穏やかな空には大きな雲が浮かび、男も女も真すぐな眼差しをして、身も柔らかな子供たちは夢にも増して美しい。樹木生い茂る森、眠たげな川の流れ、そして黄昏の隅々を取巻いて、忍び寄るそよ吹くやさしげな風も半ば眠りにについている。グランチェスターの子供たちの肌は白く、日毎、夜毎に水浴びをする。女たちはなすべき務めを果たし、男たちは思想の掟を護る。彼らは善を愛し、真理を崇める。青春の日には声高らかに笑い、(老いを感じては立ち上がり、自ら銃を持ち果てると言う) ……

ああグランチェスターに見てみたい。月影よぎる枝々の騒ぐ様を。胸騒ぐまでに甘くすえた匂いを、忘れ得ずして忘れ難い川の匂いを吸ってみたい。小さな木々の間ですすり泣くそよ風の音を聞いてみたい。ああ堂々と聳える愉の木立の群はいまもなおあの聖なる土地の守り神なのだろうか。トチの木は崇高な夢をむさぼって、いまもなお学問とゆかりなき川の水にその陰を投じているのだろうか。夜明けはひそやかで冷え冷えとした金と銀との水から生れ出た神秘の姿なのか。そして日没はいまもなおハズリングフィールドか

(註43) 原文‘Dan Chaucer’の‘Dan’は中世語‘dominus’ (L=lord, master) の短縮語である。Geoffrey Chaucer を敬意を込めてこのように呼んだと思われる。エドモンドスペンサーの *Faerie Queene* にある‘Dan Chaucer, well of English vndefyled’ (Book iv Canto ii. St. 32) からのエコーであろう。

(註44) ここにはチョーサーの『カンタベリー物語』‘The Reeve’s Tale’ l. 3923. にうたわれている水車小屋があったという。

らマディングレイまで黄金の海なのだろうか。そして日暮れて後、生れ出る夜に先んじて野ウサギが麦畑に顔を出すのだろうか。あゝ川の流れの水は淀みの上にひんやりとした穏やかな茶色の水をたたえているのだろうか。そしてこの不滅の川はいまもなお笑いさざめくのか、水車小屋の下で水車小屋の下で。そして美の女神はいまもなおその姿を見い出されるのだろうか。確固たる姿としてまた静かなる類のものとして。深々とした牧草地もいまもなおあるというのか、虚実と真実と痛みとを忘れるために……あゝ教会の時計台^(註45)はいまもまだ3時10分前^(註46)を指しているのだろうか。そしてお茶の蜂蜜^(註47)は、いまもまだとりのけてあるのだろうか。

この論考中のケンブリッジの街と大学の歴史的変遷に関する記述は特に下記を参照した。

Michael Hall, *Cambridge* (Newton Abbot: The Pevensey Press, 1995)

Geoffrey Tyack, *Oxford and Cambridge* (London: A & C Black, 1995)

The Oxford Literary Guide to the British Isles, Drothy Eagle and Hilary Carnell ed, (Oxford University Press, 1980)

(註45) ここにはチョーサーの『カンタベリー物語』‘The Reeve’s Tale’ 1.3923. にうたわれている水車小屋があったという。

(註46) Grantchester Church. ルパートブルックが住んだ tea house (Orchard House) の目の前、道路一つを隔てて建つ。その塔の時計はルパートの戦死後この死を記念して3時10分にセットされた。(註24) 参照。

(註47) ルパートが Orchard House から移り住んだ The Old Vicarage の Mrs. Neeve が彼に用意してくれた tea 用の蜂蜜。